

星空のコンチェルティーノ お琴

作・演出 大日琳太郎 作曲：長谷部匡俊

この作品はギター、神楽太鼓、バリトンとソプラノ、女声合唱が協奏する幻想的な音楽劇。第二次大戦中のガダルカナル島と長崎の悲劇を軸に、主人公が戦争による心の傷を克服し立ち上がっていく姿を終幕に見せて、平和への願いを星空に託す愛の物語である。お琴というのはヒロインの役名であり、コンチェルティーノとは小協奏曲という意味。物語の中には、奇跡的にガダルカナル島から生還した第二師団「勇 1313 部隊」の衛生兵故庄司善守氏（仙台市六郷出身）の口伝を基にした戦地の様子が再現されており、また登場人物にも伊達騒動や台湾にゆかりのある役名が付されており、郷土史を縦糸に、七夕伝説を横糸に織られている。

2015年1月31日の「天祐台湾 感恩公演」では、エヴァグリーン交響楽団と、台北市民合唱隊有志の共演により日台初の合作音楽劇として上演され、拍手喝采を浴びた。

あらすじ

三沢光夫は作曲家を志す青年であった。彼は日本軍衛生兵として南方を転戦。奇跡的に復員するが、仲間を見殺しにして自分だけが助かったという罪悪感から曲が書けなくなっていた。

かろうじて持ちかえった戦友の形見の鈴を遺族に渡そうと、長崎へ向かった光夫は、列車から降りると、不思議な竹やぶの中に吸い込まれてしまう。そして光夫の前に突然美しい女性が現れるが、彼女は記憶を喪失しており、自分の名前も過去も分からないのであった。しかし彼女こそが、亡き戦友の唯一の遺族である田川琴その人なのである。彼女の生まれ故郷は台湾で、幼い頃は鄭玉琴という名であった。

二人で話をするうちに、光夫は戦地ガダルカナル島で起こった悲惨な戦争体験を語り出す。食糧が尽き次々と餓死していく者。友軍の船に縄梯子を昇って乗り込む際、力尽き海に落ちて溺れ死んでいく者。台湾出身の田川功吉（鄭清煌）という傷病兵から「長崎に暮らす姉に渡してほしい」と、形見の鈴を預かったこと。そして、救助のボートに乗って迎えに来ると田川に約束し、自筆譜を彼に預け、島から脱出したこと。しかし、救助のボートは戦況に阻まれ、田川ら傷病兵を砂浜に置き去りにして友軍の船は出航した。結局、迎えに来るといふ田川との約束は果たせなかったのである。

一方お琴は、星世界の聖水に映し出された自分の過去に愕然とする。昭和20年8月9日、長崎浦上の橋のたもとに鈴を握りしめた黒焦げの死体が見える。それが田川琴であるというのだ。自分はずでに死んでいると言う事実を受け止められず、半狂乱となるお琴。しかし英霊となった弟が背後に立つと、「功吉、やっと会えましたね。私も母の所へ連れて行っていただけますか。」と、未練を断ち切って天上へ旅立つ覚悟を決める。

お互いの過去を赤裸にした二人は、震える心を重ね合い、形見の鈴を握りしめて、別れの憂いを慰める。折しも今宵は七夕。……時は移り、お琴は昇天する。と、ひとり取り残された光夫のそばに、ガ島に置いてきたはずの「星愛の歌」の楽譜があるではないか。光夫がそれを手にして夜空の星と交信すると、不思議なことに旋律が次から次へと湧き上がり、たちまち一曲が完成する。光夫は作曲家として生きることを心に決める。そして、星空を仰ぎながら、台湾と日本を歌でつなぎ、二つの国を豊かで美しいふるさとにすると誓うのであった。



